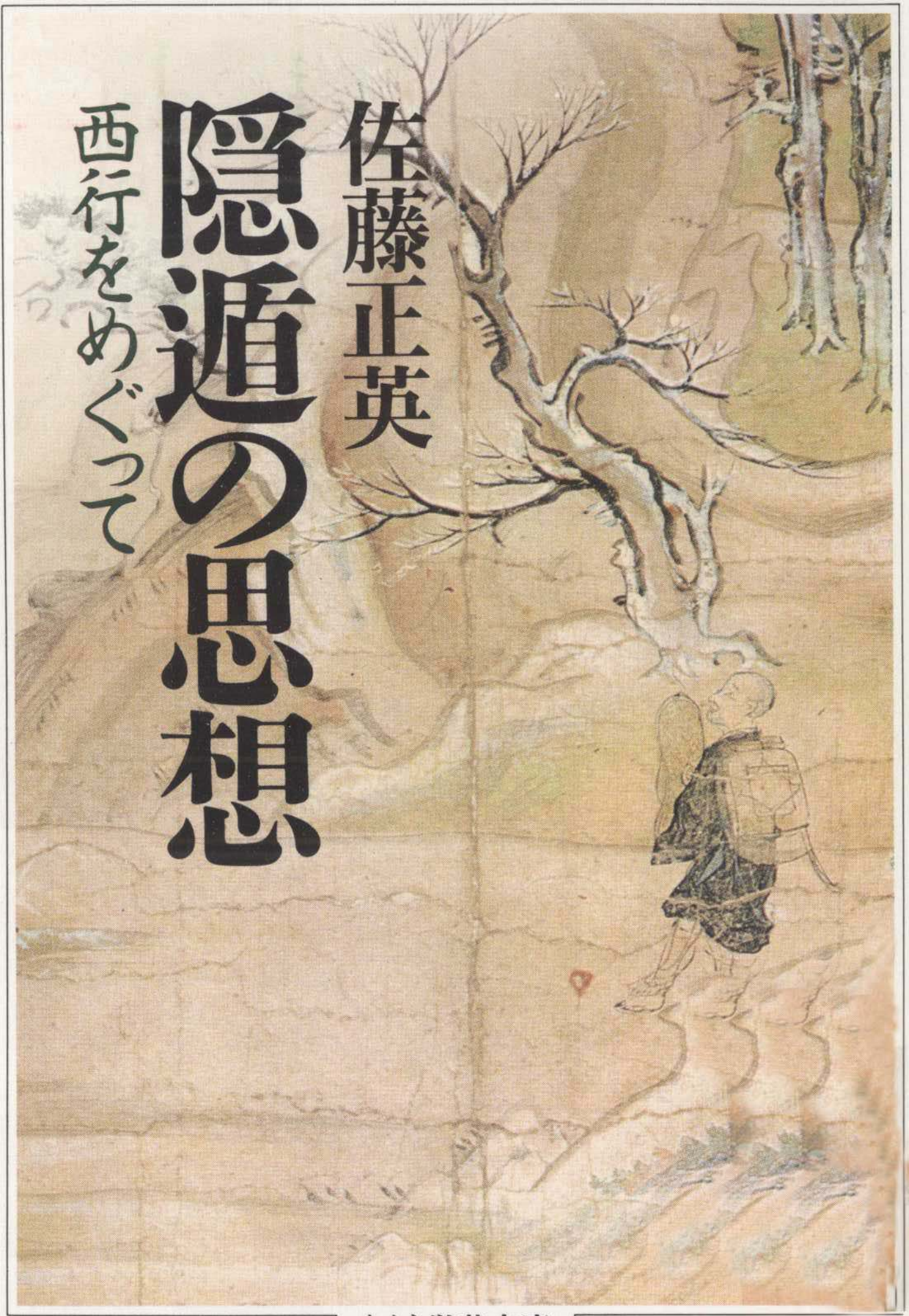

隠遁の思想

西行をめぐって

佐藤正英

ちくま学芸文庫

隠遁の思想

二〇〇一年十一月七日　第一刷発行

著　者　佐藤正英（さとう・まさひで）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社鈴木製本所

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三
© MASAHIDE SATO 2001　Printed in Japan
ISBN4-480-08673-0 C0112

ちくま学芸文庫

隠遁の思想

佐藤正英

筑摩書房

目次

序章　なぜ隠遁か　7
夏目漱石『行人』をてがかりとして
第一章　世俗世界からの離脱　75
第二章　辺境への往還　145
第三章　原郷世界の夢想　207
あとがき　291
文庫版あとがき　297

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

隠遁の思想——西行をめぐって

序章　なぜ隠遁か

夏目漱石『行人』をてがかりとして

一

夏目漱石『行人』の主人公である長野一郎は、旅先で友人のHさんに次のように告白する。

「こうして髭をはやしたり、洋服を着たり、シガーをくわえたりするところをうわべからみると、いかにも一人前の紳士らしいが、実際僕の心は宿なしの乞食みたように朝から晩までうろうろしている。二六時中不安に追いかけられている。情ないほど落ちつけない[1]」(塵労三)。

『行人』の連載が始まったのは大正元(一九一二)年である。夏目漱石はこの年四十六歳であった。当時、髭を生やしシガーをくわえ洋服を着た紳士がどれほどハイカラな存在であったかは想像にあまりある。髭を生やしシガーをくわえた一郎の外貌や挙措は人目を惹かずにはおかなかったであろう。一郎は近代の先端を行く存在として設定されている。

一郎のハイカラさは当時における最新の風俗にとどまらない。西欧近代に身を投げかけ、その全てを受け入れようとする一郎の姿勢の端的な現れである。そうした姿勢は多かれ少

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なかれ当時のひとびとに共通するものであり、ひとびとはそこに自己の在りようの投影を見たであろう。そのかぎりにおいて、一郎のハイカラさは当時のひとびとにとって今日の私たちが想像するよりも異和感を抱かずにすんだであろう。

一郎にとって西欧近代は自己を託しうるものでありえなかった。一郎は四六時中落ち着かない。不安に追いかけられている。一郎はいう。

「進んでとどまることを知らない科学は、かつてわれわれにとどまることを許してくれたことがない。徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、どこまで行っても休ませてくれない。どこまでつれていかれるかわからない」(塵労三)。

西欧近代が保証するところの輝かしい未来は、一郎にとって安んじて身を託しうる世界ではない。そこでは落ち着かなさがますます増幅され、拡大されて不安は恒常化するだろう。ひとびとは不安に馴れてしまい、不安はひとびとの意識にのぼることすらなくなるであろう。一郎にはそのような世界として感得されている。一郎にとっては、西欧近代がもたらした進歩の観念はもはや未来をユートピアとして構築するだけの力を失っている。

西欧近代の摂取を無邪気に競いあっている同時代のひとびとのなかにあって、一郎はいちはやくこのことを感じとっている。ひとびとと一郎との間の異和は、人目を惹く一郎のハイカラさにではなく、ハイカラさの奥にある一郎の落ち着かなさ、不安にある。一見し

たところ、一郎は、ひとびとと一団になってただその少し前を先頭きって走っているとしか見えない。しかしその実一郎はひとびとの一周さきを走っている走者なのである。ともに走っているひとびとはそのことに気づかずにいる。異和はそこにある。

そのことが一郎の不安の告白をいかにも観念的な生硬なものにしている。一郎は自己の実感につき動かされるがままに、忠実に語っている。にもかかわらず一郎の言葉がひとびとにとって剝き出しの観念の羅列としてしか響かなかったであろうことは容易に想像できる。ひとびとにとって一郎の言葉はただの饒舌でしかない。一郎は苛立ち、自己の実感にいっそう固執する。一郎の言葉はますます生硬なものとなる。この悪循環から一郎は抜け出せずにいる。ひとびとと一郎との間の懸隔が甚しすぎて、実感の内実が十全な表現に達するのに必要な余裕が一郎にはない。

一郎は外貌や挙措に現れているよりもはるかに深く西欧近代に触れている。西欧近代との深いところでの出逢いがなかったならば、一郎の不安がこのようなかたちをとることはなかったであろう。西欧近代は一郎の不安において不可欠の契機となっている。しかしこのことは一郎の不安が西欧近代そのものに由来することを意味してはいない。不安という言葉遣いそのものは西欧近代のものである。[2] しかし一郎の不安を西欧近代それ自体のうちに求めることはできない。

一郎は西欧近代に対して醒めてしまっている。その醒め方が観念的な先走りの域を出な

いものであったにせよ、一郎は西欧近代に夢を託すことができずにいる。一郎はそこで夢を見ることはできないと覚悟しつつ、なお西欧近代に親炙するほかに途はないと感じている。一郎の落ち着かなさは、西欧近代の歩みのうちに胚胎する不安とは由来を異にする。その意味で一郎の不安を、西欧近代がそれ自体において内包しているところの近代批判をも含めて、西欧近代の枠組みのなかで捉えることはできない。

一郎の不安は、西欧近代を前に立ちすくんでいる一郎自身の在りようを告げている。自己の身を全的に投げかけての西欧近代との出逢いが、一郎の不安を鋭く照らし出さずにはおかなかった。一郎の、いかにもハイカラな西欧近代風の観念に満ちた言葉遣いは西欧近代そのものに向かっているのではなく、あくまで一郎自身に向かっている。西欧近代風の観念は一郎にとって、いわば自己の在りようを照らし出す鏡なのである。

一郎の不安は一体どのようなものなのか。一郎は落ち着けないといい、いてもたってもいられないという。一郎はなぜ不安なのであろう。なぜそのようにむやみと焦らずにいられないのであろう。

私たちは通常さまざまな事柄やもろもろの行為がそれぞれに意味あることとして存立している世俗世界に生きている。世俗世界は私たちにとって馴染み深い世界である。私たちは世俗世界をあらためて事新しく世界として意識することはない。その必要がないからである。それほどに私たちは世俗世界に馴染んでいる。それ故世俗世界は多くの場合漠然と

したかたちでしか私たちにとって現れていない。私たちは通常それと意識することなく世俗世界に自己の生の拠りどころをもっている。

一郎と同時代のひとびとにとって、西欧近代の進歩の観念がもたらした未来の像は、いかに驚異的なものであったにせよ、ひとびとの馴染んだ世俗世界にそのまま連続し、その素朴な延長上にある世界であった。それは、ひとびとが馴染んだ世俗世界を補強し、さらに強固にするものと捉えられていた。ひとびとは、西欧近代と全面的にあい対する必要がなかった。ひとびとの多くは西欧近代を自在に取捨撰択することのできる部分的存在であると捉えていた。進歩の観念すらひとびとにとっては部分に関わるものでしかなかった。

しかし、一郎はひとびとのもっているような自己の馴染みうる世界をもちえないでいる。一郎は自己の生の究極の拠りどころを失った「宿なしの乞食」である。「自分のしていることが、自分の目的(エンド)になっていないほど苦しいことはない」(塵労三)と一郎はいう。

自己の生の拠りどころの喪失は「自分の目的(エンド)」の喪失として意識されている。一郎は自己が一体何のためにこうして生きているのか、なぜこのような在りようをしているのかがわからなくなっている。そのことを痛いほど感じ、そのことに怯えている。そのことが一郎を落ち着かせないのである。一郎は自己の生の究極の目的がなんであるかを事新しく措定せずにはいられない。一郎はそこまで追いつめられている。一郎は焦らずにはいられない。

どんなに漠然としたものであるにせよ、自己の生の拠りどころをもっていると感じている私たちにとって、自己の生の究極の目的はそこからごく自然に派生してくる。私たちは通常自己の生の究極の目的をあらためて措定する必要を感じない。生の究極の目的を問うことは、私たちにとってことさらに事を構えるそらぞらしい在りようである。一郎の大仰な身振りに私たちは閉口し、しらけさせられる。一郎の不安の告白が私たちにとって生硬なものに響くもうひとつの理由はここにある。一郎が自己の馴染みうる世界を失っているということ自体が私たちにとって異和なのである。

一郎にとって自己の生の究極の目的を措定することは他のなににもまして切実なことであった。「目的（エンド）」が定まっていない以上、なにをしてもそれは「方便（ミインズ）にもならない」（塵労三）と一郎はいう。すべてのことがあやふやでしかない。いつもどこかに薄ら寒い隙間風が吹き抜けているように感じられてならない。そんなあいまいさから一郎は抜け出せずにいる。一郎はそのことに苛立っている。そうした状態からなんとか遁（のが）れ出ようとしている。そして、自己の生の拠りどころ、つまり自己の生の本来の在りようが可能となる場を見出そうと懸命にあがいている。自己の生の究極の目的を措定せずにいられないのはそのあがきの現れである。

一郎にとって、西欧近代は、ひとびとの馴染んだ世界とは異質の、総体としての世界でなければならなかった。一郎はそこに「自分の目的（エンド）」であることができる世界を求めた。

西欧近代は自己の生の究極の目的をもたらしうるかという問いをもって一郎は西欧近代にあい対している。そのことが一郎をして同時代のひとびとの一周さきを走らせている。しかし幸か不幸か、一郎にとって西欧近代のもたらした進歩の観念は自己の生の拠りどころとなることはできなかった。一郎は行きどころを失い、不安はますばかりであった。

二

自己の生の拠りどころはなにかという問いの答えを他者から聞き出すことはできない。答えはみずから求めるほかない。そのことは一郎にもよくわかっていた。それでいながら一郎は自己の不安をHさんに訴えずにはいられなかった。一郎はそれほどまで追いつめられている。

一郎の告白にHさんは不意を衝かれる。Hさんは次のように答える。自己の生の究極の目的はなにか、つまり自己の生の拠りどころはなにかという問いはだれしもがなんらかのかたちで直面せざるをえない問いである。一郎の不安はすべてのひとが味わわねばならない不安であり、また味わっているはずの不安である。一郎一人がそのように苦しむことはないであろう。Hさんはそういって一郎を慰める。

Hさんは一郎にとって心の許せる旧くからの親友である。学生だった頃にはよく議論も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com